〔書　評〕

# ジャン・イヴ・カミュ，ニコラ・ルブール（南祐三 監訳　木村高子 訳）『ヨーロッパの極右』（みすず書房，2023）

土　倉　莞　爾

目　　次

1．はしがき
2．本書の梗概
3．いくつかの論点
4．あとがき

## 1．はしがき

かつて，書評者（土倉）は，本［書評］の対象書から引用して，次のように記したことがある。

> フランスの政治学者ジャン＝イヴ・カミュ Jean-Yeves Camus と歴史学者ニコラ・ルブール Nicolas Lebourg は，2015年に刊行された共著書の中で次のように主張している。2014年EU 議会選挙の結果は，オランダ，ギリシア，フランスの３カ国で，それぞれが，ポピュリズムの３つのモデルを示したと言う。すなわち，オランダのヘルト・ウイルデルスの「自由党」PVV は移民と EU の問題で票を減らし，得票率13.3％と伸び悩み，ギリシアの極右政党「黄金の夜明け」も当初は好発進したが，結局9.3％の結果だった。これに引き換え，第３のモデルになるフランスの FN は，24.3％とフランスで首位となった。カミュとルブールによれば，FN はマリーヌの代になって，「要求の党」から福祉国家的な「保護の党」に転換したからだという（土倉 2020, 132；Camus et Lebourg 2015, 61-2；2017, 48-50）。

「FNはマリーヌの代になって，『要求の党』から福祉国家的な『保護の党』に転換した」という指摘が非常に重要である。すなわち，FN は極右の党だとすれば，従来の極右は，ケインズ主義的な自由リベラルな政策である福祉国家体制には馴染まなかったと

言えるからである。

さて，ノンフィクション作家保阪正康は，2023年７月１日付『朝日新聞』読書欄にこの本書の優れた紹介をしている。きわめて的確で簡潔な書評なので要約しにくいのだが，次のように思い切って要約してみよう。保阪は次のように述べる。

> 本書は，極右勢力の歴史的な流れを追いかけると同時に，現状を仔細に見つめている。この極右の流れを，著者はヨーロッパ各国史の節目で浮上する政治的対立に組み込んで論じるので，全体図がよくわかる。著書は，ネオリベラルなポピュリスト政党が持つイスラムへの嫌悪感や，かつての東側諸国の極右勢力についても触れている。

偏った引用になったかもしれないが，引用は以上だけにとどめたい。問題は，「ネオリベラルなポピュリスト政党が持つイスラムへの嫌悪感」である。ポピュリスト政党が持つイスラムへの嫌悪感が強いのは，ヨーロッパのポピュリスト政党の特色である。ただ，そこに，なぜ，「ネオリベラルな」という限定が付くのであろうか？

言い換えると，強いてネオリベラルなポピュリストとして適合すると言えるのは，アメリカの元大統領トランプ，あるいは英国の元首相故サッチャーであろうか？　もっとも彼らは新保守と呼ぶにふさわしい。フランスのマリーヌ・ルペンの場合，ポピュリストであった父ルペンに比べて，福祉国家的な「保護の党」に転換させつつある「国民連合ＲＮ」を率いるマリーヌ・ルペンも「ネオリベラルな」とは呼びがたい。

極論すれば，問題は，「ネオリベラルなポピュリスト政党」ではなくて，「ナショナルなポピュリスト政党」ではないだろうか？　あるいは，「ニュー・ライトとしてのポピュリスト政党」と呼ぶべきではないか。

対照的に興味深い書評として，イワン・クラステフ，スティーヴン・ホームズ著『模倣の罠　自由主義の没落』（中央公論社）に寄せた政治学者吉田徹の「この１冊」を紹介しよう。吉田によれば，「本書で観察されるのは，ポスト冷戦期に生まれた『模倣』の連鎖だ。中東欧諸国とロシアは，民主化を余儀なくされた。しかし，模倣を強制された中東欧諸国では，ナショナリズムが刺激され，地位を喪失したロシアは復讐を目論み，既存のリベラルな秩序の挑戦者に化したとする」（『朝日新聞』2021年６月12日）。

吉田の「書評」に付言すれば，中東欧諸国の「ナショナリズム」とロシアの「復讐」の挑戦を受ける西ヨーロッパはどうなのか？結局のところ西ヨーロッパの「自由主義の没落」がキーワードであると言えないだろうか？。

とまれ，以上のような問題意識で，この著書に接近してみたい。

## ２．本書の梗概

### 第１章　極右はいかにして誕生したのか

著者（カミュとルブール）の本書の言説は次のような言葉から始まっている。大切だと思われるので引用しておきたい。

> 「極右 extrême droite」という言葉は，1980年代半ばに「国民戦線 Front National」（FN）が選挙で躍進して以来，フランス政治の現状分析や解説に用いられてきた。ほかの国でもオーストリアでのイェルク・ハイダー率いる「オーストリア自由党 Freiheitliche Partei Österreichs」（FPÖ）の政権入り（2000年），イギリスのバーンリー，ブラッドフォード，オールダムで発生した人種暴動（2001年），ノルウェーでのアンネシュ・ベーリング・ブライヴィークによる襲撃事件（2011年）など，一見非常に異なる出来事や事件とともに，この言葉は馴染み深いものとなった。その本質的な曖昧さは，この言葉がしばしば「極右」に政治的に敵対する者たちによって，彼らの信用を失わせ，あるいは糾弾するために利用される場合が多いことからも見て取ることができる。この場合に目指されているのは，党派的なナショナリズムのあらゆる形式を，イタリアのファシズム，ドイツの国民主義（ナチズム），そしてそれらと同じ傾向を持つ20世紀前半のその他のナショナルな運動という歴史的経験に結びつけ，単純化することである。「極右」という名称を，その対象とされる集団が自ら採用することはほとんどない。彼らは自らを「国民運動 movement national」や「国民派右翼 droite nationale」と名乗ることを好む（カミュ，ルブール 2023，2-3）。

ポイントは，極右とは「敵対概念」であるということである。ちなみに，フランスの「国民戦線 FN」は，マリーヌ・ルペンの代になって，党名を「国民連合 Rassemblement national=RN」にあらためた。と同時に，カミュとルブールは，「しかし学術研究は，極右という党派の系譜が現実に存在することで一致している」と（同，3）述べている。

したがって，カミュとルブールが述べようとすることは，「現代ヨーロッパの極右について理解するには，まずフランスの歴史を知ることから始める必要がある。そこから，極右に関する総合的な理論を構築することができるだろう」(3) ということになる。カミュとルブールは次のように言う。

#### ナショナリズムと社会主義

カミュとルブールによれば，極右の担い手たちが，自らを「ナショナリスト」ではなく「愛国者」と呼んでいる事実は，言語・思想的な混乱を生んだ（3）と，以下のよう

ジャン・イヴ・カミュ，ニコラ・ルブール（南祐三　監訳　木村高子　訳）『ヨーロッパの極右』（みすず書房，2023）に述べる。

「ナショナルなもの」と「社会的なもの」の結合という重大な現象を説明するのは，もちろん産業革命によって生産システムに，そして普通選挙制度の拡大とともに政治討論の場に，大衆が参入したという事実であった。フランスでは〔第３〕共和政が安定化した1860年代に，さまざまな政治思想が互いに影響を及ぼし合い，イスラエルの政治学者ゼーヴ・ステルネル Zeev Sternhell が「革命的右翼」と名づけた新しい右翼が誕生した。ステルネルはこの革命的右翼をファシズムの先駆者（プレ・ファシズム）とみなしている。左翼のものから右翼のものへと最初に移行した思想信条は，ナショナリズムであった。それまでネーションを重視していたのは共和派だった（13）。

ナショナリズム思想を持つ社会主義者の代表がルイ＝オーギュスト・ブランキ *Louis Auguste Blanqui*（1805-1881）である。ブランキの生涯は，牢獄と陰謀の２つに特徴づけられる。１つの教義というよりも政治姿勢というほうがふさわしいブランキ主義は，イタリアのファシズムやフランスの極右および極左の急進的な運動に大きな影響を与えた。彼は蜂起とバリケードを褒め称えた。ブランキ派はユダヤ資本を非難し，ブルジョワ体制はアルザス・ロレーヌ地方の割譲を厭わない「国内のプロイセン人」の体制に等しいと批判して，パリ・コミューンに参加した。彼らはその後，「復讐将軍」の渾名を持つナショナリスト，ブーランジェ将軍の周囲に参じている（14）。

1920年代には平和主義者だったギュスタヴ・エルヴェ Gustave HÉRVÉ（1871-1944）は，1932年にはファシストとなる（15）。

同盟 ligue（リーグ）という形式の運動は，第２帝政のいわゆる自由帝政期にあたる1860年代に誕生した。リーグとは選挙よりも実際に行動することを重視する政治組織であり，政治プログラムよりもむしろ目標に重きを置いていた。階級という概念の超越を目指す彼らは，掲げる理念のもとに「結集 rassemblement」することを目指した。「結集」は，彼らの用語のなかでも特に重要な言葉であった。リーグという形式は，大衆を政治運動に組み込む最初の契機となったのである。ポール・デルレード（1846-1914）に率いられた愛国者同盟は，フランス革命をネーションと同じくらい称揚しており，「共和派，ボナパルト派，正統王朝派，オルレアン派―我々にとって，これらはどれも個人名 prénom にすぎない。『愛国派』こそが我々の姓である」というそのスローガンは，しばしば模範となった（16-7）。

こうしてデルレードとともに共和主義的で社会的な極右が勢力を伸ばした。「国民戦線 FN」の創設者で初代党首のジャン＝マリー・ルペン Jean-Marie Le Pen が長年掲げてきた「国民的，社会的，人民的な右翼」という標語は，この精神に完全に則ったものである。デルレードは，1887年から89年にかけて絶大な人気を誇ったブーランジェ将軍を支持した。議会主義政治に対する批判や民衆への訴え，ネーションの称揚といった側面が，王党派からかつてのパリ・コミュー

ン闘士までをブーランジェ運動に結びつけた（17）。

ブーランジェ運動は，ナショナル・ポピュリズムという極右の１潮流が結晶化したものであり，暴力を基準として極端主義を定義することがいかに無意味かを示している（17）。

「ナショナル・ポピュリズムはフランス極右の主流になった」とカミュとルブールは言っているが，その「ナショナル・ポピュリズム」という表現は，ピエール＝アンドレ・タギエフ Pierre-André Taguieff が持ち込んだという。詳しい経緯は次のようになる。すなわち，カミュとルブールによれば，

ナショナル・ポピュリズムはフランス極右の主流となった。とりわけ「国民戦線（FN）」の選挙における躍進がその契機であったが，同党が得票率を大きく伸ばしたのは，1972年の設立から10年が経過した時期のことである。実際，政治学者のピエール＝＝アンドレ・タギエフがフランスに初めて「ナショナル・ポピュリズム」という表現を持ち込んだのは，選挙における「国民戦線 FN」の最初の躍進という現象を理解しようとするなかでのことだった（18）。

ナショナル・ポピュリズムは，政治は衰退に向かっており，健全な人民だがそこからネーションを救い出せると考える。ナショナル・ポピュリズムは，ネーションを衰亡に追い込みかねない，いわゆる寄生的制度の策謀や社会的亀裂にもかかわらず，救済者と人民の直接的なつながりを重視し，細民つまり「良識的な」「平均的フランス人」をなす術もないほど堕落したエリート層の裏切りから守ると主張する（18）。

彼らはつまり，左派の社会的価値観と，右派の政治的価値観（秩序，権威など）とをつなぎ合わせているのである。したがって，いかに耳障りのよい社会主義的な言辞を弄しようとも，ネーションにふさわしくないがその恩恵に与ろうとする少数の他者を排除した後で全員を団結させようというその目標は，階級闘争のイデオロギーから完全に決別している（18）。

ネーションとプープル peuple を一致させるために，彼らは peuple という語が有するいくつかの意味の配置転換を試みた。プープルとは，政治的集団としてのデモス（市民）であり，生物学的集団としてのエノトス（民族）であり，社会的集団としての「庶民階級」であり，そして「プレブス」つまり大衆である（18）。

したがってこれは「偽りの知性主義」に対して「大地に根ざした」価値観を重視する，階級を超越した思想なのである。ナショナル・ポピュリズムは130年という月日をかけてフランスの政治に根づいた。それゆえこれを安易にナチズムに結びつけることは，フランスの極右思想の系譜から切り離すことに劣らず無意味である。まして呪文を唱えれば消えてくれるだろうと考えるのはまったく馬鹿げている。なぜなら，ナショナル・ポピュリズムはフランス政治システムの構造的な一部だからである（19）。

右翼を３つ（反革命派，オルレアン派，ボナパルト派）に分けたルネ・レモンの視点はこれ以降の時代には当てはまらないというゼフ・ステルネル Zeev Sternhell の指摘は正しい。統合さ

れた諸潮流は，ステルネルが「革命的右翼」と名付けたものとなって，1918-1940年の反民主主義な運動，ヴィシー政権の国民革命思想，さらにステルネルによれば，ファシズム諸派へと受け継がれていく（25）。

### 複数のファシズム

カミュとルブールは，歴史家ゼフ・ステルネルを引照しつつ次のように述べる。

1970年代末以降，ステルネルは，フランスには（レモンが定式化した３つの右翼から構成された）「三位一体」の右翼が存在したためにファシズムがほとんど根づかなかったという見解や，ファシズムは第１次世界大戦後のイタリアで発祥したのだとする，当時一般的だった考えに異を唱えた。ステルネルによれば，ファシズムは19世紀末にフランスに発祥したのだという（26）。

社会の周縁を過激化させ，大衆と結びつけたものこそ，総力戦という経験であった。イタリア，ドイツ，フランスで社会を闘争の共同体と捉え，戦時と同様に平時においても一体性を保持させることが各国ファシズムの政治目標となった（28）。

「右翼の１部が『革命派』と自称し始めたのは1918年以降のことである。この点において，ステルネルによる『革命的右翼』という用語は史実に反する使用法だったと言えるだろう」（28-9）とカミュとルブールは言う。そして次のように続ける。

これほど多様な解釈が存在するのは，限られた時間と空間のなかで，思想や分類が百出したからである。実際，「極端主義者 extrémiste」という語がフランスの言論界に登場したのは1917年のことで，フランスの新聞・雑誌はこの語を用いて，ロシアで権力を握ったばかりのボリシェヴィキを激しく攻撃した。こうして「極左 extrême gauche」に対峙する勢力として，「極右 extrême droite」が位置づけられるようになった（29）。

### 多様な急進化

「フランスの極右を論じる場合に問題となるのは，その形態の複雑さである」（37）という主張の線上で，カミュとルブールは，フランスのファシズムについて次のように議論を展開する。

フランスにファシズムは存在しなかったとする見解と，フランスはファシストで溢れかえっていたとする見方との間に３つ目の可能性を考えることができる。ドイツとイタリアにおいて，ファシズムとは権力に到達し，軍隊化され，階層化された単一政党による現象であった。しかしこれはフランスには当てはまらない。両大戦間期のフランスには，その歴史的展開とプレ・ファシズム的な思考の広まりを支えとした，強力な反自由主義の傾向が出現していた（38）。

たしかに，そのとおりであろう。「強力な反自由主義の傾向が出現」がポイントである。付言すれば，これが現代のポピュリズムの基層であると考えておきたいと考えられないだろうかと思っている。

さて，カミュとルブールは，続いて，ヴィシー体制について，次のように論じる。

> ヴィシー体制は極右の体制だったのだろうか？　明らかにそうだった。ただし，「国民革命」というその旗印が，一部の知識人，そしてネオソシアリスムと計画経済主義の政治家を糾合していたことを忘れてはならない。また共産主義からの転向者や，革命的社会主義出身の平和主義者もその中に含まれ，ドレフュス派からコラボラシオンへの道をたどった者まで存在したことも想起されるべきである。ペタン元帥に率いられた体制が共和政を棄て，政党政治や民主的な選出に基づく諸制度を廃止したのは，当時の特殊な状況だけが理由だったのではない（38）。

と同時に，カミュとルブールが，次のように論じていることが重要である。

> ヴィシー政権の行動のうち最も重みを持ったのは国家的な反ユダヤ主義で，「新秩序」の擁護者にしてみれば，それなくしてフランス国民の再生は完遂しえないものであった。とはいえ，ヴィシー政権に抵抗した右翼ナショナリストや革命派右翼が存在したことを無視するわけにもいかない（39）。

カミュとルブールによれば，「1945年以降，レジスタンスに参加したことで正統性を獲得した右翼とは対照的な，ドイツと共謀した勢力やペタン主義を標榜した小集団を指すために「極右」という言葉が一貫して用いられたのは，それらヴィシーに反抗した右翼が存在したからであった」（39）ということになる。

ヴィシー体制下においてペタンが単一政党の創設を拒否し，諸集団間や諸個人間の競争が絶えない状況の中で，ピエール＝アントワーヌ・クストー（1906-1956）は極右週刊誌『ジュ・スイ・パルトゥ Je suis Partout』の1943年９月17日号で次のように書いている。

> 「フランス・ファシズムは存在する。それは政党ではない――むしろその泡沫のようなものだ。何よりもそれは精神の状態，一連の反応，声明を理解する英雄的な態度であり，非妥協的な姿勢や欲望の追求であり，一貫した偉大さと清廉さへの意志であり，ナショナルなものを放棄することなくヨーロッパを受け入れることである。ユダヤ人不在の社会主義であり，理性であり，信仰である」（39-40）。

### 第３帝国のヨーロッパ新秩序

以下のように，カミュとルブールは，ヒトラーの第３帝国はヨーロッパに新秩序をもたらしたという。斬新な着想である。

ジャン・イヴ・カミュ，ニコラ・ルブール（南祐三　監訳　木村高子　訳）『ヨーロッパの極右』（みすず書房，2023）

ヒトラーは第３帝国の衛星国における極右勢力の内紛を巧みに利用した。彼は，国民の目には伝統的な権威に映る「国民/民族派」を指導者に就ける一方で，急進派を代替品の精鋭として温存した。国民/民族派が対独協力者を構成した。多くが伝統的なエリート層出身である彼らは，社会政治的には保守派に属していた（48）。

第２次世界大戦後，すべてのファシスト集団は国際的につながり，ヨーロッパ中心主義的な目標を共有した。したがってファシズム思想の変遷は，各国に共通する明瞭な年表に基づいて定義することができる。つまり1919年以前の思想的懐胎期，明らかに複数の段階を経た1919-1942年，そして1942年以降のネオファシズムの段階である（53）。

ポピュリズムとの関連で言えば，「1942年以降のネオファシズム」とポピュリズムは同じなのか，別物なのか，いろいろな考え方があるように思われる。

### 新しい波

それに関連して，カミュとルブールが，「1942年に登場したネオファシズムはそれ以前のファシズムから完全に切り離された存在ではない。しかしそれ以前のファシズムと比べると，ネオファシズムは国家よりも社会を，そして既存のネーションよりもヨーロッパを重視している」（53）と述べていることは重要である。カミュとルブールは次のように続ける。

現代ヨーロッパにおける急進極右は，全体として，１つの政治的系譜というよりも，マージナルなカウンターカルチャー，あるいは「サブカルチャー」――軽蔑的な含意を持たない，少数派の文化的表象を指す社会学の用語――というほうがふさわしい。この現象は，特にフランスで顕著である（55）。

カミュとルブールによれば，「1945年以降のヨーロッパの極右運動は，４つの波に分けることができる」（60）と，次のように述べる。

1945年以降のヨーロッパの極右運動は，４つの波に分けることができる。

1945年から1955年まで続いた第１の波は，1930年代の全体主義思想との近似性を特徴とし，しばしば「ネオファシズム」と呼ばれる。

1950年代半ばに登場した第２の波は，過激化した中産階級の運動であった。

多くの研究者が「ナショナル・ポピュリズム」と呼ぶ「第３の波」は，1980年代から2001年まで続いた。

そして2001年９月11日以降，ポピュリストが「文明の衝突」と形容する第４の波が起きている（60-1）。

現　　在

カミュとルブールによれば，オランダの政治学者カス・ミュデ Cas Mudde が皮肉を込めて――しかし適切にも――，その長さゆえに「買い物リスト」のような一連の基準と呼んだ，既存のあらゆる分類モデルに従えば，「国民戦線 FN」は極端な事例であることがわかる（61），としてミュデのリストを次のように紹介する。

ミュデによれば，次のような特徴を備えたものは極右に属するという。

（国家的あるいは民族的）ナショナリズム，排他主義（たとえば人種差別主義，反ユダヤ主義，自民族中心主義，民族再主義），外国人嫌悪，反民主主義的特徴（指導者崇拝，エリート主義，一元主義，国家有機体論），ポピュリズム，反主流派の精神，「法と秩序」の擁護，エコロジーへの関心，失われた伝統的な指標（家族・共同体・宗教など）への強い郷愁，そしてコーポラティズムと一部のセクターに対する国家による管理，さらに自由市場への強い信頼の３つを組み合わせた社会経済プロジェクト（61）。

さて，FN について，カミュとルブールは次のように観察している。

フランスで強烈なインパクトを残した FN は，方法論的な問題を突きつけている。1990年代に，党内に抱え込んだ新右翼の影響下で民族としてのネーション観」を前面に押し出していた同党は，2010年代になると，普通の政党化戦略を実行し，そのおかげで党勢を拡大させた（62）。

FN は，ナショナル・ポピュリズム政党である。同時に同党は，議会制民主主義の枠内で，選挙を通じて権力の掌握を目指す「高度産業社会」に登場した政党なのであり，戦前のファシズム的な諸党派や，1939年から1945年に登場した対独協力主義の諸団体とは直接的な関係を持たない（63）。

FN のきわめて例外的な特徴の１つは，1972–1999年という長期に亘って，時には真っ向から対立する主張を持つフランス極右のさまざまな勢力との連合に成功したことである。その間，緊張や分裂を経験しながらも，党としての枠組みを維持することに成功してきた。こうして彼らは，権威主義的な共和派と王党派を，カトリック伝統主義派と復興異教主義者 Néo–Paganistes を，かつての対独協力者とレジスタンスを，「不遇の時代」（1945–1984年）を経験したあらゆるナショナリスト小集団の活動家と新ドゴール派諸政党や自由主義政党から急進化した抵抗者を，すべて，「ナショナリスト間の妥協」という精神の下で１つにまとめあげたのである（64–5）。

2014年の EU 議会選挙で極右が最大の成功を収めたのはフランスであり，その担い手はマリーヌ・ルペンの FN であった。彼女の党は24.3％の得票率を得て EU 議会の第１党となった。この時の FN は，それ以前よりも幅広い社会層の有権者から支持されている。徹底的なナショナル・ポピュリストだったジャン＝マリー・ルペンの時代には，内発的には国内エリート層を，外発的には押し寄せる大量の移民を要因として，進行しつつある国家の崩壊を終わらせる救済者

が人民の間から出現するという見取図が描かれていた（68）。

ところが，マリーヌ・ルペンの時代になると一変すると，カミュとルブールは言う。すなわち，彼女は，ネオポピュリズム的な要素を取り入れたのである。2012年以降は，「完全な主権主義」と呼ぶべき路線へと舵を切った。その主張は，政治的・経済的・文化的な主権主義というべきものだった（68）。

カミュとルブールによれば，フランスの危機は，政治的・文化的なものであり，完全な主権主義はその欠陥に対して提案された回答なのだと言う。と同時に，「現在も進行中の右傾化は，各国の極右勢力に，それぞれの社会にふさわしい政治的提案を行うことを可能にしている」（71）と結論する。換言すれば，現代ヨーロッパの極右勢力は，各国ごとに多様であるということであろう。

## 第２章　ファシズムの後に何をすべきか

カミュとルブールによれば，第２次世界大戦後，極右諸勢力は自らの急進性を新たに価値づける必要性に迫られた。ファシズムやナチズムという政治的実権の継承を主張する集団にとって，これはとりわけ大きな問題であったと言う（74）。たしかに，現在の極右勢力とファシズムの関係は微妙な問題である。そこに，ナショナリズムとポピュリズムも絡まって来る。これについて，カミュとルブールは次のように要約する。

> 第２次世界大戦後，ナチズムやファシズムを表明することは，とりわけドイツ，オーストリア，イタリアでは法によって禁じられた。反対する活動家やメディアによって「ネオナチ」とレッテルを貼られた運動の大半は，実際には，各地で誕生した権威主義的ナショナリズムから生まれたものである。ただし，彼らが1930-1940年代のイタリア・ファシズムとドイツの国民社会主義の両方から，あるいはその片方から影響を受けていることは間違いない（74-5）。

いわゆる「ネオナチ」とナチズムの関係は無視できないものがある。おそらく第２次世界大戦後にはナチズムはタブー視された。しかし，ナチズムの基層のようなものは，底流において存続していたのではないか。さらに言えば，そこにナショナリズム（反移民，反難民主義），反イスラム，反ユダヤ主義は，ポピュリズムを通して民主主義や自由主義を腐食し始めているのが現状ではないだろうか。

### ナチズムの再評価

「ネオナチ勢力の選挙参加が法律で許されている国では，彼らは特に取り繕うことも

なく，自らの存在や思想をそのまま広めようとすることもあった。しかしその選挙結果は，芳しいものではなかった」(76) と，カミュとルブールは言う。しかしながら，次のように続けているのが重要である。

> こうしたなか，ギリシャの「黄金の夜明け Chrissi Avghi」は特異な軌跡をたどっている。この党はネオナチ政党としては近年，ヨーロッパで最大の得票率を誇っているのだ。近年の選挙結果の展開は，財政危機によりギリシャが被った国家的・社会的屈辱と大きく関係している。「黄金の夜明け」の得票率は1999年に0.75％，2009年に0.46％と低迷していたが，2014年に9.32％に急伸し，2015年９月の国政選挙では７％に落ち着いた（76-7）。

「すべてのネオナチ組織がホロコーストを否定しているとしても，ホロコースト否定論者がネオナチだけに限られているわけではない。ホロコースト否定論者は『セクト（カルト）』のようなものである」(80) と，カミュとルブールは言う。これは重要である。なぜなら，ホロコースト否定論は政党形成のモチーフにはならないからである。それは組織的な運動というより「信者たちの非公式ネットワークのようなものである」(80) からである。したがって，ネオナチは，おそらく政党ではないと言ってよいのではないだろうか。しかしながら，ネオナチの心底にはナチズムの底流のようなものが存続しているという観点も大切にしなければならないと思われる。

「現在のヨーロッパで最も有名なホロコースト否定論者といえば，間違いなくデイヴィッド・アーヴィングであろう」(81) とカミュとルブールは言う。カミュとルブールによれば，アーヴィングは『ヒトラーの戦争』（*Hitler's War*，1977年）［邦訳は，赤羽，1983］で，ホロコーストが意図的なものだったか否かという点やヒトラーの個人的な関与に疑問を投げかけた。

「現在のヨーロッパのホロコースト否定論者は，インターネットを利用する者が多い。オンライン上の主張の犯罪性に関する法的なグレーゾーンを利用して，反人種差別法を迂回しつつその主張を広めることができるからだ。2005年にフランスで下されたいくつかの判決はプロバイダの責任を認め，否定論者のサイトを検索できないようにフィルターを設定することを命じている」(82) と断ったうえで，カミュとルブールは次のように述べる。

> こうして今では大手サーチエンジンに掲載されない，閲覧数の多い一部のサイトはアクセス不可になったものの，合衆国憲法修正第１条で表現の自由が保障されているアメリカでは，否定論者にはまだまだ活動の余地がある。否定論者たちはしばしばアメリカや東欧（特にロシア）のプ

ロバイダを利用することで，やすやすと規制回避に成功している（82）。

このように述べた後で，カミュとルブールは「いずれにせよ，ネオファシズムはヨーロッパ極右運動の再編に重要な役割を果たしており，そのなかでも大きな効果をもたらしたのは，イタリア・モデルであった」（82）と述べる。問題はイタリア・モデルである。カミュとルブールは次のように言う。

### イタリアの実験

ドイツの傀儡国家で武装親衛隊に操られていたイタリア社会共和国は純粋な革命的ファシズムを体現していたとネオファシストたちは考えており，1946年に設立された「イタリア社会運動 Movimento Sociale Italiano＝MSI」は，その精神の継承を主張した。メンバーに言わせれば，MSI という略称は，「ムッソリーニよ，貴方は不滅である Mussolini, sei immortale」を意味していた（83）。

活動家たちの熱気で充満していた「イタリア社会運動 MSI」は急進化した極右が思想と実践を刷新する場であり，テロリストの道を選ぶポピュリストの供給源だった（84）。

イタリアでは，党派政治や文化闘争に関する数々の革新的な戦略が生まれたが，同様にナショナリズムを超えてインターナショナリズムを追求する運動においても，この国は最大の推進力になった。つまりネオファシズム・インターナショナルのなかでイタリアは重要な位置を占めたのだが，研究者ロジャー・グリフィン Roger Griffin はその実態を，唯一の指導者を持たない多頭支配による国際化された文化闘争と適切に評価している（88）。

このように見てくると，イタリアにおける極右ポピュリストの運動は，第２次世界大戦からのファシズムを一番継承していることがわかる。ここで，一般論として，現在の極右ポピュリストの運動は，第２次世界大戦の時代のファシズムを継承するものであると言えるのであろうか？言えるとすれば，どの程度の継承なのか，興味深い問題に直面することになる。それは，ヨーロッパ・ナショナリズムに関連する問題であろう。

### ヨーロッパ・ナショナリズム

ヨーロッパ・ナショナリズムを論じるにあたって，カミュとルブールは，「ユーラフリカ」という概念を提起して，次のように述べる。

「ユーラアフリカ」という概念は，1921年にフランスの政治議論のなかから生まれ，その後も廃れることはなかった。当初の目的は，植民地をヨーロッパ諸国の共通の財産とすることによって，フランスとドイツを接近させ，ヨーロッパ建設を助けることであった。その後これに計画経済というテーマが組み込まれ，広大なユーラフリカ圏の自給自足経済を確立するという展望とともに考えられるようになった。この構想はベルギーでも政治的左右を問わず支持され，さらに対

独協力主義者にも受け入れられるなど，確かな成功を収めた。ユーラフリカ構想はまた，オーストリアのリヒャルト・フォン・クーデンホフ＝カレルギー Richard von Coudenhove-Kalergi の反ヨーロッパ運動からの後押しも受け，1930年にはムッソリーニのイタリアでもいち早く取り入れられた（94-5）。

リヒャルト・フォン・クーデンホフ＝カレルギーは，後に，「ヨーロッパ合衆国のパイオニア」と呼ばれるほど著名である。「ユーラアフリカ」という概念は，「ヨーロッパ統合」と近接していることを看過できない。ただし，1930年にムッソリーニのイタリアで取り入れられたのは，「ファシスト的ユーラアフリカの実現実現という目的のために，この構想から平和構築という責務を除外して受容された」と，カミュとルブールは但し書きを付けている。しかしながら，それは，逆説的には，「ユーラアフリカ」は極右の概念でもあるという観点も成立することを意味する。

カミュとルブールによれば，1954年にフランソワ・ミッテラン François Mitterrand は，クーデンホフ＝カレルギーの系譜に属するユーラアフリカ構想を再び取り上げたし，1956年にはフランス左翼の政治家ガストン・ドフェールも，「ユーラフリカ市場」における海外領土の地位について検討している。実際問題として，ヨーロッパ統合の礎を築いたローマ条約の交渉の場でユーラフリカの問題が討議された最大の要因は，フランスが海外領土に関わるコストを分担させたいことにあった（96）。ミッテランは後にフランス大統領として，ヨーロッパ統合の旗を振る重要な政治家になるが，それらの源流は以上のような「ユーラフリカ」構想にあるのではないかと想像できるである。

カミュとルブールによれば，「こうして急進右翼は，実現可能で動員力を備えたユートピア抗争として『ユーラフリカ』を受容した」（96-7）という経緯をたどることになって行くが，想像をたくましくすれば，マリーヌ・ルペンが「EU，OK」のサインを出したとしても，それは軟化したとは言えないのではないだろうか。言い換えれば，「ヨーロッパ社会運動 MSE」はファシズムの名誉回復を目指していた」（100）のである。カミュとルブールは，次のように言う。

MSE はファシズムの名誉回復を目指した。しかし，運動の中核に元武装親衛隊員を多く抱えていると同時にファシズムを改良する必要性を実感していた MSE は，単にかつてのファシズムを再興させようとしたのではなかった。運動が目指したのは，人民投票によって選ばれた首長に導かれ，反共産主義とコーポラティズムを掲げるヨーロッパ帝国の建設であった（100）。

しかしながら，カミュとルブールによれば，1941年にローザンヌで「ユーラアフリカ

運動」を設立したガストン＝アルマン・アモードルズの招集に開催されたチューリヒ会議の当初から，MSE は危機に陥っていた。というのは，1951年５月に開催されたマルメ会議の路線に不満な者たちにより同年９月にチューリッヒ会議が開催されたからである。アモードルズはマルメ会議にも招待されていたが，会議参加者たちの「ヨーロッパ像」は十分に人種的な基礎のうえにないとして，参加を拒否したという（101）。

運動の課題はナチズムから新人種主義に展開してゆくと言ったらよいのだろうか。カミュとルブールの論述は次のように展開する。

### ナチズムから新人種主義へ

> チューリヒ会議の参加者たちは新たな組織を立ち上げた。ただしそれは離反した新しい分派として立ち上げられたのではなかった。当初「ヨーロッパ連絡事務所」とされたこの組織は，やがて「ヨーロッパ新秩序 NOE」と名乗るようになったが，これはナチのスローガンを想起させる，非常に挑発的な名であった。設立宣言においては，白人種の諸民族集団の平等が唱えられ――スラヴ系もこれに明白に含まれていた――，ネオファシスト国家連合の創設の必要性が主張された。しかしこの人種差別主義は，ユーラフリカ構想と，広く認められた極右のイメージの両方からかけ離れたものだった（101-2）。

カミュとルブールによれば，旧ナチ党員とネオナチは互いに協力し合った NOE は，1951年に設立され，1959年にドイツ連邦共和国で公益法人として認められた「旧武装親衛隊員相互扶助協会」と協力関係に入ったが，そのフランス支部はモーリス・バルデッシュ Maurice Bardèche の指導下にあった。NOE を構成する組織が拡大したのは，そのヨーロッパ観が白人至上主義と一致していたからだと指摘できる（107-8）。

### 青年ヨーロッパ

カミュとルブールによれば，ヨーロッパ・ナショナリストの力学の中でとりわけ独創性を発揮したのが，「青年ヨーロッパ Jenne Europe（JE）」である。その名はワロン人ジャン・シリアールでから切り離すことはできない（109）。カミュとルブールは次のように述べる。

> シリアールは，ナチ親衛隊情報部リエージュ支局の管理下にあった「大ドイツ帝国友好協会」にしばらく所属していた。これがシリアールの「反ナチ」や「極左的傾向」の実態であった。JE は何よりも脱植民地化への拒絶から生まれた運動である。1960年７月に，コンゴ共和国のベルギーからの独立に反対して，シリアールとポール・タイヒマンが「在アフリカ・ベルギー人防衛行動委員会」を創設した（110）。

フランスでは，1961年に JE の団体が，1963年にはその機関紙の発行が禁止されただけに，グループの形成に苦労した（114）と，カミュとルブールは断りながらも，次のように言う。

> それでも JE は非常に野心的であった。1964年７月にマドリッドで開かれた会議には運動の指導部やピエール・ラガイヤルド Pierre Lagaillarde，そしてヨーロッパ各地のさまざまな運動の代表が集まった。翌月会場をニースに移して，ヨーロッパ（フランス，スペイン，オランダ，ポルトガル，西ドイツ，スゥエーデン，イタリア）とラテンアメリカの各青年運動の幹部たちが会議に参加した。この会議では，「内政状況が差し迫った場合に」関係各国で「国際軍団」の創設が決定された（115-6）。

JE という「青年ヨーロッパ」運動，あるいは「ネオナチ運動」とは，一体何であったのか？カミュとルブールによれば，ベルリンの壁崩壊後，東ドイツの秘密警察シュタージの文書が公開されると，東側の諜報機関が1950年代以降，西ドイツのネオナチ運動に資金援助していたことが明らかになったが，その目的は，フランスにおける西ドイツのイメージを傷つけて，ヨーロッパ防衛共同体計画を転覆させることだったという。事実，1952年に条約が署名されたが，イタリアとフランスで批准されず，構想は挫折した（116-7）。カミュとルブールは次のように，もう１つの事例をあげる。

> フランコ体制が JE に避難所を提供し，その後支援を取りやめたことは示唆的である。マージナルな過激運動が受け入れられるためには，西側の秩序に従うよりほかない。1966年に JE は，スペインで夏季キャンプを開催した（117）。
>
> しかし1967年３月，９ヵ国の代表を集めマドリッドで開催予定だった JE のシンポジウムは，スペイン当局によって直前に禁止された。シリアールはそこに，フランコ体制に対するアメリカの影響を見て取った（117）。

「西側の秩序」と「アメリカの影響」が重要である。「ネオナチ運動」とその範疇に入る「青年ヨーロッパ」運動は東西冷戦という体制的な枠組みの中では基本的な要素とは言えないものがある。たしかにファシズムの後に起きた，ファシズムを継承した潮流であったかもしれないが，「ネオナチ運動」は，やがてもっと大きな潮流である「ポピュリズム」に吸収されて行く前兆の現象であったといったほうが好いのではないだろうか？

しかし，そのような長期的な展望はさておき，実際に短期的には，カミュとルブールによれば，マドリッドの JE グループから，「ヨーロッパ友好スペイン・サークル

CEDADE」が創設され，これは1966年にバルセロナで「文化協会」となった。CEDADE はその思想を急激に発展させ，1969年以降はネオナチ的な集団となり，それまでのスペイン極右思想にはなかった激しい人種還元主義と反ユダヤ主義を掲げるようになった。CEDADE は「ヨーロッパ新秩序 NOE」，とくに「ヨーロッパ・ナショナル行動連盟 FANE」に所属するフランスのネオナチとも繋がりを持ち，その結果 CEDADE のフランス支部が設置された。これらのネオナチ組織の多くが，イタリア・ネオファシズムの過激派の影響を受けていた（118）。

しかしながら，それはさておき，ここではシリアールの思想と行動に注目しておきたい。カミュとルブールは次のように述べている。

> シリアールは，早い時期からアメリカ問題に注目していた。彼は，アメリカ合衆国を西欧の経済的，政治的，そして戦略的な敵とみなし，西側諸国の白人による完全な連帯を拒否した。それはつまり，「アメリカ帝国主義に対抗する世界戦線」に与することを意味していた（124）。

ここまで来ると，シリアールの「政治思想」に付き合うことができなくなる。すなわち，フランスの極右の思想とは言えないし，「JE」の思想の枠をもはみ出すのではないかと思われて来る。

### 1968年５月への抗議運動

カミュとルブールによれば，左翼急進主義のネオナチズムへの適応は，「ヨーロッパ新秩序 NOE」に属する最も有名なフランスの団体，すなわち「ヨーロッパ・ナショナリスト行動連盟 FANE」によって試みられた（129），という。

> 同団体は３つの組織，つまり1966年に設立された「アクションオクシダン」，「ジャン＝ロベール・デボーの新聞『現実のヨーロッパ』の支援委員会，そして，シリアールよりもエミール・ルセル Emile Lecerf の思想に共鳴して JE 運動から離脱したヨーロッパ社会主義者の集団である「シャルルマーニュ・サークル」が合流して1966年に設立された（129）。

しかし，FANE は，カミュとルブールによれば，その行動主義ゆえに，特にある潜入工作員のシオニストの活動家が引き起こした1980年のパリのコペルニク通りの爆弾テロ事件の犯行声明をきっかけに，フランス政府によって活動禁止を命じられ，組織は解消された。この活動禁止措置は，形式上の不備を理由として，さらに２度更新されたという（130）。

ヨーロッパ各国の極右諸団体の錯綜は複雑を極めるが，カミュとルブールは，おそら

く次のように主張したいのだと思われる。２人は次のように言う。

> ファシズムは確かに刷新された。しかしこれを超国家的かつ社会的にあらたに方向づけようという意志は，困難にぶつかり続けた。とはいえ，諸々の刷新はポピュリストにとっても新右翼にとっても有益であり，その努力はまったくの無駄というわけではなかった（133-4）。
>
> 大衆運動と階層化を特徴とするファシズムが産業社会の現実を映し出していたように，ネオファシズムはポストモダンという型に適応した現象であった。したがって，国際的組織を構築する動きが失敗し続けたことについては，まったく異なる視点からの説明が必要となる（134）。
>
> 標章，手法，語彙，思想を伝達するネットワークは，20世紀最後の10年間にまったく新たな有効性を獲得した。しかしその結果，ネオファシストたちは，彼らが望んでいたよりもはるかに単純な知的産物へ，とりわけ白人至上主義へと方向づけられていったのである（134）。

ということは，カミュとルブールは，おそらく，ポピュリズムとネオ・ファシズムをほぼ同義語として考えているのではないかということになる。それは第２章「ファシズムの後に何をすべきか」の次章「ホワイト・パワー」で明らかにされてゆくであろうと思わせる。

## 第３章　ホワイト・パワー

第３章の冒頭で，カミュとルブールは，「白人で構成された国際的な連合組織の結成こそ，いくつかの運動が目指した目標であった」（136）と述べる。

1962年夏にイギリスで誕生した「国民社会主義者世界連合 WUNS」は「ユニバーサルナチズム」と呼ぶものを最もよく体現していた。まるで宗教の教義のように宣言されたその設立憲章は，カミュとルブールによれば，次の７つの原則から成り立っている（136）。

> １．人種のための戦い，２．各社会の有機的性格，３．永遠不変の自然法則の尊重，４．生存のための戦い，５．貨幣至上主義の否定，６．個人が個として成長する権利，そして，７．アドルフ・ヒトラーは，シオニズムとボルシェヴィズムのせいで破滅に瀕した世界に，不思議な神の摂理が与えたもうた贈り物であるという信仰である（136-7）。

### 大西洋を越えたセクト主義

カミュとルブールは，ネオナチとは政治的現象よりも文化的現象であるという繰り返し確認されてきた事実をまたしても確認していると思われる。つまりネオナチは，社会通念を拒否し，それから最もかけ離れたマージナルな思想に惹きつけられた若者の受け皿となっている場合が多いと言う。ネオナチは，活動面においては，ユニバーサル・ナ

チズムという枠組みを利用して共同で宣伝活動を行い，ネットワークを通じた接触を可能とする。公式の国際組織を必要とすることなく，1983年初めには，「移民の退去を迫るナイジェリア政府が講じた措置を支持する大量のビラが撒かれた。組織的な活動ではまったくなかったものの，これは活動家と諸団体との間のシンプルな関係を超えた，実践的な闘争行動であった（140）。

たしかに，文化的現象ということで，政治運動とは言えないのであるが，インターネットの時代の政治運動，政治思想として大きな力になるのであろうか？まだまだ顕著な文化的現象にも達していないのではないかと思われる。

しかしながら，カミュとルブールが次のように力説していることは，看過できないだろう。カミュとルブールは次のように述べている。

> 若者文化の断片としてのこうしたネオナチズムは，1960年代以降，「党派的」でなく「文化的」である限りにおいて，若者の文化が盛り上がりを見せていた西ヨーロッパ社会に順応していった。この点で，アングロ・サクソン文化がヨーロッパのネオナチに及ぼした影響力の大きさは注目に値する。白人至上主義は，ヒトラーの階層的な人種還元主義に完全に取って代わったのである（140-1）。

すなわち，人種還元主義から白人至上主義への転換が重要である。

### 極右のスキンヘッド

スキンヘッド運動という社会政治学的な構造物は，プロレタリアートの解体過程において発生した（145）と，カミュとルブールは言う。そして次のように述べる。

> スキンヘッド運動の急進右翼へのシフトは，ヨーロッパの主要国（フランス，ギリシャ，ハンガリー）では1983年から1986年の間に，そして一部の東欧諸国（チェコ，ルーマニア）では1989年の直後から起きたのである（145）。
>
> 彼らの暴力活動は，ドイツ人ナショナリストやアメリカ人だけでなく，ロシアのさまざまなナショナリスト集団の注意も引いた。ロシア人のスキンヘッドの数は５万人にも上ると推測され，2006年に起きたチェチェン人虐殺には2000人が関与した（145）。

結局のところ，極右スキンヘッドの一般的特徴は次のような点であるとして，カミュとルブールは次のように要約する。

> 結局のところ，極右スキンヘッドの一般的特徴は次のような点である。人種差別主義，プロレタリア意識，組織を嫌悪する一方で徒党を組みたがること，音楽を手始めとして，あるいは音楽を基盤として思想的に教化されていくこと。スキンヘッドだからといって，必ずしもネオナチと

いうわけではないが，それでも極右スキンヘッド集団で最も幅を利かせているのはネオナチ思想である。必ずしも物理的暴力に訴えるわけではないが，暴力を称え，これを行使する集団に属していることは事実である（150-1）。

とくに，「音楽を基盤として思想的に教化されていく」点が現代的であろう。「こうした音楽の刷新は，文化闘争の問題であると同時に，暴力の問題として考えるべき現象である」（152）とカミュとルブールが付言していることも示唆的である。

### 暴力，急進化，ポピュリズム

カミュとルブールは，極右とは，いくつかの傾向が国際的に交差し昇華して形成されたものととしてしか解釈できないような領域であることを前提として，大衆に広まりつつあるイスラム嫌悪や周縁に追いやられた者たちの暴発は決して孤立した現象ではない。「小さな火花も荒野を焼き尽くす」と，毛沢東が述べたとおりである（159）と言う。カミュとルブールは続けて次のように論じる。

このことを証明するのが「ブロック・イダンティテール Bloc identitaire」の指導者たちの軌跡である。ファブリス・ロベールとフィリップ・ヴァルドンはもともと，革命的ナショナリズム思想を持つフランス人のスキンヘッドで，ハードコア・ロックグループメンバーであった（159）。

音楽を介して政治化するという路線の選択は，アメリカにおける展開から着想を得たものであった（159）。

「暴力，急進化，ポピュリズム」は，音楽を介して「政治化」するという着想は実に見事な指摘であると思われる。カミュとルブールは，さらに続けて次のように述べる。

「ブロック・イダンティテール」は，反ユダヤ主義，反シオニズム，全体主義，直接行動主義，復興異教主義などを放棄することで，政治的再建のための取り組みを徹底的に行った。複数の団体に分派することによって運動は並列構造となり，同時に法の追及を免れることが可能となった（162）。

「ブロック・イダンティテール」は，その新しい姿にふさわしいアジプロ・キャンペーンを実施し，非常に幅広い活動家集団を組織することに成功した（163）。

いずれにせよ，スキンヘッド運動を出自とする者たちは，しばしば彼らにつきまとう愚か者のイメージとは裏腹に，政治活動を展開することに成功したのである（163）。

「この点で，ギリシャの『黄金の夜明け』は重要な意味を持っている」（163）とカミュとルブールは言う。1980年に設立されたこの団体は当初，CEDADE に倣って思想を結集し，「ヨーロッパ新秩序 NOE」の動きに加わっていた（163-4）。国際的に広まったこの一派についてカミュとルブールによれば，

ジャン・イヴ・カミュ，ニコラ・ルブール（南祐三　監訳　木村高子　訳）『ヨーロッパの極右』（みすず書房，2023）

> 2015年以降，彼らの名称，形態，スローガンなどを取り入れた集団がヨーロッパ各国で創設されている。スペインの「黄金の夜明け」，イタリアの「イタリアの夜明け」，ハンガリーの「マジャールの夜明け」などである。しかし国内事情はギリシャと異なるため，同国の「黄金の夜明け」のような成功をもたらす手段を見つけられずにいる（164）。

カミュとルブールは，「ホワイト・パワー」について論じた章人種差別を次のように締めくくる。

> 結局のところ，「ホワイト・パワー」やそれに連なる運動は，急進極右の刷新がいかに人種問題と関わっているのかを示している。戦後数十年に亘って，理論家や指導者たちはファシズムを刷新し，人種差別政策の負の側面からファシズムを切り離そうと試みてきたが，運動の吸引力となる最も効果的な誘因はおそらく民族・文化問題であり続けている（165）。

カミュとルブールのこの書の原初の出版は2015年であるから，ずいぶん時間が経緯しているが，いまだに有効性を失わない。それどころか，昨今のイスラエルのガザ進軍を目にすると，ますます現実性を帯びているように思われる。

## 第４章　新右翼

「新右翼の政治的な性格は，多くの政治学研究の関心集めてきた。それはいくつもの運動に新右翼というラベルが貼られたからであり，また『ヨーロッパ文明調査研究集団GRECE』のような主要な運動は発言や立ち位置を急転させただけでなく，自らの歴史を書き換えるという極端なまでの傾向を示すことさえあったからである」（168）とカミュとルブールは言う。カミュとルブールによれば，

> 自分たちの語法や思想を受け入れさせるために右翼は文化闘争を行うべきだという「右翼グラムシ主義」が GRECE に強く刻印され，やがてこれはフランス右翼に欠くべからざる主張になるが，そうだとしても，新右翼という現象は知的領域に限定されたものではない（168-9）。

しかしながら，結局のところ，新右翼は，「国民戦線 FN」躍進の煽りを食ったと，カミュとルブールは言う。すなわち，極右のポジションに陣取り，選挙で成功を収め，メディアで強いインパクトを残すことで支配的な地位を獲得したのは「国民戦線 FN」のほうだった。「闘争的な反ファシズム運動は，FN を主なターゲットとし，新右翼に対する関心は薄れていった」（170）というカミュとルブールの指摘は鋭い。端的に言えば，「文化と思想」は実践的な政治と比べれば弱いものであろうか？

## 新右翼現象の柔軟性

カミュとルブールによれば，「『新右翼』という表現が最初に使用されたのは，アメリカでバリー・ゴールドウォーターが1964年の大統領選挙で敗北した後，アングロ・サクソン的な意味でのリベラリズムに対して，ウルトラ保守主義的で，宗教的価値観が色濃く，ポピュリズムや反平等主義に流されやすく，人種差別撤廃に非寛容な右翼が出現したという文脈においてであった」（170）という。カミュとルブールはさらに続ける。

> アメリカの広告業者リチャード・ヴィグリーが広めた「ニューライト New Right」と言う言葉は，アメリカ，オーストラリア，イギリスではその後，ロナルド・レーガンやマーガレット・サッチャーのような，反動的かつ道徳を重視し，強権的機能を有する国家を志向する，より広い潮流を指すようになった（170-1）。

「しかし」，とカミュとルブールは，力説する。これが重要である。

> しかし，アメリカの「共和党」右派，イギリスの「保守党」，あるいは「ニュージーランド・ファースト党」らと同定しうるこちらの右翼は，GRECE から派生した新右翼やフランス国外の友好団体とはいかなる関係もなかった。それどころか，両者の思想は対極にあった（171）。

「両者の思想は対極にあった」ことに注意したい。極論すれば，ジャン・マリー・ルペンの FN からマリーヌ・ルペンの MN への変容に関係して来る問題だと思われる。というのは，カミュとルブールによれば，GRECE が活動の過程で左翼に接近していったことを意味するのではない。むしろ明白に右翼に位置取りつつも，GRECE が取り入れられていった思想や，リベラルなグローバリゼーションへの反対のような，もともと左翼に深く根を下ろしていた主張を我が物にしていったことを示していると言えるからである（172）。そして，カミュとルブールは，複雑で込み入った口調であるが，次のように要約する。

> フランスでは，1978-1980年と1993年に，新右翼は最も活発な議論の対象となった。1993年７月13日付の日刊紙『ル・モンド』で政治学者ピエール＝アンドレ・タギエフ Pierre-André Taguieff が観察と共謀とを分ける一線を超えたと主張する記事に添えて「警戒せよ」という呼びかけが40人の知識人の署名とともに発表されたのである。しかし，新右翼が実は少なくとも全ヨーロッパ規模の思想潮流であり，諸外国のなかでも特にドイツとイタリアでは，フランスと同等の影響力を持っていたという事実をみえなくさせていたのは，議論に潜むフランス中心主義にほかならなかった（173-4）。

「フランス中心主義」という表現は，非常に興味深い。

## 新右翼とヨーロッパ・ナショナリズム

カミュとルブールによれば，GRECE は1969年１月に正式に設立された。初期の指導者に，批判的左翼出身のメンバーはいなかった（187）。

「ヨーロッパ社会主義」の試みについては，ヨーロッパ・ナショナリズムの運動に始まり，1968年５月の運動の失敗を経て，とりわけピエール・ヴィアルによって率いられた民族至上主義的 völkisch な傾向を持つ新右翼に至ったという展開を確認することができる（187）。

タギエフは GRECE の初期の20年を以下のように４期に分けて説明している（187）。

① 1968-1972年：強烈な反マルクス主義を特徴とする「生物学的リアリズム」型の人種還元主義。
② 1972-1979年：強烈な反ユダヤ・キリスト教主義を特徴とする，反平等主義およびインド・ヨーロッパ語族の文化的人種差別主義。
③ 1979-1983年：非常に反米的な反リベラリズムおよびその他の「還元主義」。
④ 1984-1987年：民族多元主義と革命的な第３の道（187）。

## ユーロリージョナリズム

カミュとルブールによれば，民族至上主義的傾向を示す一派は，文化戦略に専念するという方針を掲げる GRECE のなかで最も扱いにくい勢力であった。彼らは革命的ナショナリスト頻繁に接触していただけでなく，時には彼らと完全に同化したし，ポピュリスト政党に加入することもあった（189）。

ピエール・ヴィアルは「国民戦線 FN」の指導部に加わり，同党内外の復興異教主義的な民族至上主義勢力を結集して，1995年に「大地と人民」を創設した（189）。

しかしそれは結局 GRECE の過激な排他性を硬化させるとともに，幹部の意向を無視するわけにはいかないことを明らかにした。彼らの活動は，1998年に表面化した FN の指導権争いの際に非常に活発化したが，この時ジャン＝マリー・ルペンはブルノ・メグレの一派を「人種還元主義者」と非難し，彼らを遠ざけた（190）。

少し，私見を挿めば，ブルノ・メグレの敗北は，ジャン＝マリー・ルペンの復古反動的路線によるものであったと考えられて来たように理解していたのだが，GRECE に背いたメグレ一派は，ルペンに敗れても仕方なかったかもしれない。

（複数の）サブカルチャー

「イタリアは特殊なケースである。同国の極右思想は，さまざまな異教の母体たる原初の伝統が存在すると主張するユリウス・エヴォラ Julius Evola から大きな影響を受けているからだ」（199）とカミュとルブールは述べる。カミュとルブールはエヴォラについて，次のように言う。

> エヴォラは近代性を退化ととらえて非難し，「伝統」が精神的にも政治的にも具現化されていた原始の時代の精神性への回帰を訴え，英雄としての貴族階級を称揚し，党派という形式を拒否して神聖化された「秩序」を重んじ，生物学ではなく「精神という種」に基づく人種差別主義を提起した（エヴォラの『人種論生成』はファシスト政権に支持された）（200-1；Camus et Lebourg, 2017,145.）。

とはいえ，カミュとルブールは，エヴォラは高く評価しているとは言えない。カミュとルブールによれば，クリスティアン・ブーシェは「これは人を無能にするものだ」と何度も批判した。ブーシェはエヴォラに個人的な関心を持っていたが，エヴォラの議論を政治シーンに持ち込めば，無気力で精神的に硬直した人間に自分が英雄で知識人であると信じ込ませ，思い上がりの不動主義を生み出してしまうと考えたのである（203）。カミュとルブールのエヴォラ批判はまだ続く。

> 2008年にフィリップ・バイエ Philippe Baillet はホロコースト否定論者の出版社から，マニフェスト『白人種の反革命のために』を出版した。そこで彼は，「我々が生き残る唯一のチャンスは，来るべき民族的な文明化戦争において，白人種の新しい種類の人間が到来するか否かにかかっている」と主張している。この強烈なまでに単純化された結論を見ると，エヴォラのような複雑な思想の30年に亘る影響がいったい何を成し遂げたのかと，考えないわけにはいかない（203-4）。

カミュとルブールの極右思想についての慨嘆が分かるような気がする。しかしながら，あえて私見を挟めば，極右の思想は，ポピュリズムの形をとりながら，根強く更新され続けているのではないだろうか，ということである。

## 第５章　宗教的アンテグリスム

カミュとルブールは次のように述べる。重要である。すなわち，「カトリック・アンテグリスム Antégrisme と極右との間には構造的なつながりが存在すると，一般的には信じられている。一方，プロテスタント各派は，良心の自由，教条主義の否定，個人の権利の重視といった観点から，極端主義を拒否するはずだ，と考えられている」（212）。

しかしながら，カミュとルブールは次のように続ける。これがいっそう重要である。

> しかしながら，外国人排斥を唱えるナショナリストのポピュリスト政党が，特にデンマーク，ノルウェー，スイスといった諸国に根づいている実態は，現実がいっそう複雑であることを示唆している。アルミン・モーラー Armin Mohler は「保守革命」に関する先駆的な著作のなかで，この知的運動には強力なプロテスタント的要素が含まれており，その理由は2王国統治論に由来する，専制国家というルター派の思想にあると説明している（212）。

### 一つの信仰，複数の路線

カミュとルブールによれば，教皇から危険視されたにもかかわらず，反近代的な潮流が姿を消すことはなかった。それどころか，キリスト教民主主義の進展やカトリック進歩主義の登場といった，やがて第２ヴァチカン公会議（1962-1965年）の開催へと至る，遅々とした，しかし避けがたい教会の近代化の流れは，「アンテグラル（保守十全）カトリック」を自称し，敵対者からは「アンテグリスト」と険のある呼び方をされた勢力の組織化や言論活動を妨げはしなかった（215-6）。

ここでは，キリスト教民主主義と教会の近代化が重要である。そして，それに反撥というか，抵抗しようとする勢力のダイナミズムも無視できない。

テーマ転換の能力の高さを示す運動の一つが，「ウーヴル・フランセーズ Ouvre française」である（220-1）。これについて，カミュとルブールは次のように言う。

> ピエール・シドス Pierre Sidos によって，1969年に設立されたこのペタン主義の団体は，ファシスト的な表徴とカトリック的な白人至上主義とを同時に示すという独自性を有していた。一貫した反ユダヤ主義に加え，反シオニズムとホロコースト否定論を標榜していたウーヴル・フランセーズは，要するに，包括的な反ユダヤ主義に基づく世界観を持っていた（221）。

ここに，FN が絡むから俄然面白くなる。カミュとルブールによれば，ジャン＝マリー・ルペンの後継者の問題への関心から，ウーヴル・フランセーズは2007年以降，FN に接近した。両組織の統合について，ジャン＝マリー・ルペンとピエール・シドスの間で直接協議がなされた。ところが，2011年，マリーヌ・ルペンはウーヴル・フランセーズのメンバー（イヴァン・ベネデッティとアレクサンドル・ガブリアック）を FN の幹部からこれ見よがしに排除した。彼らはマリーヌのライバルであるブルノ・ゴルニッシュ Bruno Gollnisch を支持していただけに，マリーヌにとっては一石二鳥の措置であった。マリーヌ・ルペンは党内のナショナル・カトリリック勢力およびファシスト勢力の弱体化に成功した（221）。さらに，次のような経緯によって，ウーヴル・フラン

セーズは公的に解散を命じられた。カミュとルブールは次のように述べる。

「みんなのためのデモ」(1994年年結成)，そして特に「フランスの春」(2013年結成）のデモ行進の付近で起こった騒動を受けて，ウーヴル・フランセーズはついに解散を命じられた。マリーヌ・ルペンとフロリアン・フィリポは，FN が共和主義政党であり，このような急進勢力――彼らの考えによれば，「極右」という称号が帰せられるべき唯一の集団――とは無関係であると宣言することができた。要するに21世紀において問題となるのは，非妥協性の扱いにいかに正当性を与えるかという点である（221-2)。

少し，コメントすれば，カミュとルブールが「非妥協性の扱い」という意味がもうひとつよくわからない。ここでは，マリーヌ・ルペンの知恵袋であったフロリアン・フィリポが重要である。その意味は，フロリアン・フィリポは，その後，マリーヌ・ルペンと袂を分かち，新党を結成するからである。(未完)

## ３．いくつかの論点

監訳者であるヨーロッパ政治史学者南祐三は，『ヨーロッパの極右』の「監訳者あとがき」において，「監訳者なりに感じた本書の特徴や意義について，４つほど述べたい」(364-5）として次のように述べている。書評者はその鋭い感覚に心を打たれた。南の「あとがき」を簡単に紹介させていただきたい。

第１に，何より注目すべき点として，本書の分析の縦（時間）と横（地域）の幅の広さを特筆したい。政治的な「左―右」という概念が，フランス革命期の議場における革命推進派と反対派の位置取りに由来することはすでに広く知られた事柄と思われる。その後フランスの政治的右翼は，19世紀終盤からの大衆化の時代に勃発したブーランジェ事件などを経て，「ナショナルなもの」と「社会的なもの」に関する思想的変容を伴いながら，「ナショナル・ポピュリズム」という国民結集 rassemblement national のスタイルを作り上げた。本書によれば，これが急進化したものがファシズムであるし，このスタイルこそが，現代にまで受け継がれ，「国民戦線 FN」が体現しているフランス極右の主流なのだという（365)。

第２に，本書は極右を「ナショノ―nationaux」と「ナショナリスト nationalistes」に分類して説明することで，第２次世界大戦期以降の「極右」が有する「本質的な曖昧さ」(2）をかなりの程度まで整理することに成功している。両陣営はともに，1945年以前のヨーロッパにおける最も強烈な極右だったナチズムないしファシズムに共鳴し，協力した右翼である（366)。

戦後の極右を理解するうえでは，良くも悪くも急進性 radicalité を武器とする「ナショナリスト」の動向を把握することが不可欠であろう。ただし，この「ナショナリスト」に収斂されるものが現代ヨーロッパ極右の本質なのかと言えばそうではなく，マリーヌ派が異教的な急進派を排

除する一方で，人工妊娠中絶に対する態度を軟化させてナショナル・カトリックからも距離をとり，「脱悪魔化」をはかった時にみせたような「柔軟性」を理解することが現代における極右を知るうえでいっそう重要なのである（366-7）。

ここで，書評者の短いコメントを挿入するとすれば，マリーヌのみせたような「柔軟性」がなぜ，現代における極右を知るうえで重要なのか合点がゆかないと留保しておきたい。端的に言えば，マリーヌの党派は党名を「国民連合 RN」にあらためたように，極右から距離を措き始めたと考えられるからである。とはいえ，それは監訳者のある種の「思い入れ」に関係する重要な問題かもしれない。第3に注目すべき点に関係してくる。監訳者は次のように続ける。

第3に，これとも関連して，訳出しながら気づいた「極右」という言葉の言語上のゆらぎについて触れておきたい。原題にあるフランス語の「droites extrêmes」は，英語版では「Far-Right」になっている。むろん英語にも「extreme」という語は存在するが，いわゆる「極右」は，一般的に英語では「far-right」と表現される（367）。

第4に，本書が，日本におけるヨーロッパ極右研究の空隙を埋める役割を果たすことへの期待を述べたい。日本における研究としては，何より，第2次世界大戦後におけるヨーロッパの「新しい右翼」に焦点を当てた，山口定・高橋進編『ヨーロッパ新右翼』（山口，高橋編，1998）が挙げられ，その重要性はいまも色褪せないが，これ以降，ヨーロッパ全体を視野に入れた包括的な研究は監訳者の知る限り存在しない（368）。（未完）

## 4．あとがき

残念ながら，怠惰と原稿提出期限という限界のため，本稿は（未完）とせざるを得なくなった。近く，続編を公刊し，あわせて完成稿とさせていただくことをお約束する。深くおわびしたい。

### 参考文献

土倉莞爾（2020），「フランス選挙政治―エマニュエル・マクロンとマリーヌ・ルペンの対決―」，水島治郎［編］，『ポピュリズムという挑戦　岐路に立つ現代デモクラシー』，岩波書店，111-34頁。

山口定・高橋進編（1998）『ヨーロッパ新右翼』，朝日新聞社。

デイヴィッド・アーヴィング，（赤羽龍雄訳）（1983），『ヒトラーの戦争』（上）（下），早川書房。

ジャン＝イヴ・カミュ　ニコラ・ルブール（南祐三監訳　木村高子訳）(2023)，『ヨーロッパの極右』，みすず書房。

Camus, Jean-Yeves et Nicolas Lebourg (2015), *Les droites extremes en Europe, Éditions du Seuil.*

――――（2017），*Far-Right Politics in Europe,* tr. Jane Marie Todd, Harvard University Press.

（未完）